
1. 起業の役割について

大阪商業大学 学長 谷岡 一郎

今年もこうして、起業教育研究会の報告書が出版されること、心より嬉しく思います。継続は力なりと言いますが、関係者の皆様の苦勞はいかばかりかと推察しています。まずは関係各位の方々にお礼申し上げます。

日本という国は、近代資本主義を中心とする社会経済システムで動いておりますから、起業こそがその基本、いわばシード（発展の種）と言えるものであります。残念ながらうまく行かないチャレンジも多くあるでしょうが、それは内容が良くなかったかもしれないし、単に不運だっただけかもしれません。いずれにせよ近代資本主義下の競争は、失敗があるのが常なのです。こうして社会で鍛えられることで、良いとされたもの、効率的なものが残る社会となっているのでしょう。このようなシステム下で成功した企業が、起業のない現状維持だけの（半分国営の）企業体が跋扈する制度の国に、負けるはずはありません。ただ昨今は、その優れたシステムにも少々陰りが出てきているのも否定できない事実でしょう。チャレンジする気持ちが低下しているのでしょうか。

起業と聞きますと、我々はつい新しい業種を中心に考えがちですが、必ずしも新しい業態である必要はありません。いわゆる「第二創業」と呼ばれる、企業内改革も一種の起業と考えてよいでしょう。今まで培ったノウハウを活かして、新たな物作りに挑戦したり、経営の多角化に乗り出したりすることも、起業の一種と考えられます。たとえばフィルムが売れなくなった「富士フィルム」という会社はどうすればよいのか。「味の素」のようなひとつの製品に頼っていた会社が、売上げの下降傾向を予見した時、時代の変化にどう対応していくべきなのか。むろんどうやったかは知っていますよね（知らない人は自分で調べてみて下さい）。世の中には、そうやって発展してきた企業体が多く見受けられますが、それらの「決断をした起業家たちが日本の元気を支えている」とも言えるでしょう。むろん何もせず消えていった企業も少なくありません。

起業が大切なのは、そこに挑戦があり、その前提としての決断があるからだと考えます。どれほど知識があっても、それを実際に使えなければ、社会を良くすることはまずできません。アイデアだけではダメなのです。逆に知

識の量は限られていても、挑戦と決断するカルチャーが健在ならば、その企業や社会はまだまだ伸びる余地があるでしょう。現代の人々（特に若い人々）に欠けているのは、挑戦と決断の力ではないかと思われるフシがありますが、若い時代の起業教育はその欠点を補ってくれるでしょう。この冊子を含め、起業教育研究会に大きく期待するゆえんでもあります。

現在の高校生以下の学校現場が、大変忙しいこと、あるいは様変わりしているのは知っています。これまでのやり方や常識が通用しなくなっているとも聞いています。ひとつには、スマートフォンを中心とする情報技術革新のスピードが急すぎることもあるでしょう。起業における技術革新にも、気をつける点が多々あります。

スウェーデンの精神医、アンデシュ・ハンセンの『スマホ脳』（新潮新書、2021）によりますと、スマートフォンを使いすぎることによって集中力が落ち、結果として落ちこぼれていく生徒が多いと述べています。それ以外の多くの研究報告でも、似たようなネガティブな結果が警告されているようです。スマートフォンは、現代社会になくはならないツールであることは確かですが、使い方を間違えると良くないことが起こりうるという例として挙げました。これと同じく、起業も常にネガティブな側面を考える必要があるでしょう。

起業が完全に新しい需要を生み出すものならば、問題はあまりありませんが、新しく始めた企業体（店などを含む）の多くは、既存の企業体の売上げのいくばくかを減少させるのが常と考えられます。たとえば駅の近くでファースト・フード店をスタートしたケースでは、他の店からかなりの売上げを奪うものです。しかし先ほども言いましたように、こうして競争があるからこそ皆に選ばれるものが残るわけで、それが社会全体のレベルを上げてゆくものなのです。とは言え可能ならば、共存共栄に持ってゆく工夫をすべきなのでしょうね。

少し話がそれてしまいましたが、この冊子が教育に役立ち、日本の未来を明るく変えることを願っています。もう一度、関係者の皆様のここまでのご尽力に感謝し、私からのお礼とさせていただきます。